

魯迅の文学に見られる「死」について
——『彷徨』期の作品を中心として——

教科・領域教育学専攻
言語系コース（国語）
M08128C
立岡伸一

1. 研究の目的

魯迅は中国が清朝から中華民国へ移行する革命期に活躍した作家である。魯迅は民衆が旧伝統社会の思想の呪縛から開放されるように、小説、散文、随筆、雑文など多岐にわたって多くの文章を残した。

その中でも『呐喊』『彷徨』といった小説集には作中で多くの人物の「死」が描かれている。また詩的散文集『野草』や歴史を題材とした小説集『故事新編』など、魯迅が描く虚構世界には多くの「死」が見受けられる。

本研究では『彷徨』が執筆された時期である『彷徨』期の魯迅の文学に着目し、作中人物の「死」によって魯迅は嫌悪した旧社会の負の要素の抹殺していると仮説を立て、作中で「死」に至った人物はどのような魯迅に嫌悪される要素を持っているのかということを論証しようとするものである。

2. 論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

はじめに

第一章 『呐喊』の作品に見られる「死」について

第一節 「孔乙己」「白光」に見られる「死」について

第二節 「薬」「明日」に見られる「死」について

第三節 「阿Q正伝」に見られる「死」について

第四節 第一章の結論

第二章 『彷徨』期に見られる「死」について

第一節 「祝福」に見られる「死」について

第二節 「死火」に見られる「死」について

第三節 「孤独者」に見られる「死」について

第四節 「傷逝」に見られる「死」について

第五節 「铸劍」に見られる「死」について

第六節 第二章の結論

第三章 晩年に見られる「死」について
終わりに

3. 論文の概要

第一章 『呐喊』の作品に見られる「死」について

第一節 「孔乙己」「白光」に見られる「死」について

「孔乙己」の孔乙己、「白光」の陳士成の「死」は封建社会の官吏登用試験である科挙の制度に縛られている人物が描かれている。旧社会の象徴ともいえる、科挙に縛られた人物は魯迅に抹殺される対象であっただろうと考察する。

第二節 「薬」「明日」に見られる「死」について

「薬」では、子供が肺病であるり両親が、血で塗られた饅頭を子供に食べさせれば治癒するという迷信を聞いて、処刑された囚人の血で塗

られた饅頭を食べさせるが治癒することなく死んでしまう。旧社会の民衆の迷信を信じる性質が、魯迅の憎むべき対象であった。そのために描かれた「死」であったと考察する

「明日」でも同じく子供が病気の母親が中国医に頼るが、その甲斐なく子供がなくなる。ここでの「死」は旧社会の医療にしか頼れない旧態依然とした性質が魯迅の憎むべき対象であった。そのため「死」によってその性質を抹殺していると考察する。

第三節 「阿Q正伝」に見られる「死」について

「阿Q正伝」では阿Qという日雇い農民の「死」が描かれている。阿Qは中国の民衆のいい加減な体質を顕現したような人物である。そのために阿Qは抹殺されなければならなかったと考察する。

第二章 『彷徨』期に見られる「死」について

第一節 「祝福」に見られる「死」について

「祝福」には祥林嫂という女性の「死」が描かれている。祥林嫂はどのような負の要素があったのか。それは祥林嫂が旧社会の中を動いていただけだからではないかと考察する。

第二節 「死火」に見られる「死」について

「死火」では「わたし」と「死火」が氷の谷で出会う。「わたし」は氷の谷からを脱出させてもらうが、そのために「死火」は燃え尽きてしまう。「革命家」の象徴と考えられる「死火」を「私」は消滅させた。そのために「死」に至らなければと考察する。

第三節 「孤独者」に見られる「死」について

「孤独者」には魏連受という人物の「死」が描かれている。魏連受には魯迅自身の投影が多く見られる。生活が苦しくなった魏連受は最終的に魯迅が嫌悪するところの軍閥師団長の顧問の職につく。反革命的な行動をとった魏連受は魯迅に抹殺される対象であったと考察する。

第四節 「傷逝」に見られる「死」について

当時としては新しい自由恋愛に目覚めた二人の男女の恋愛の破綻を描いた作品である。生活が苦しくなったために、愛情がなくなったという告白を受けた女性の子君は、父親に郷里に連れ戻されて原因不明の「死」を遂げる。自由恋愛を掲げる新思想を持った女性の中には魯迅が嫌悪すべきところがないように思われるが、子君の中にも守旧的な部分があり、最終的に旧伝統社会に再帰した子君は魯迅に抹殺される対象であると考察する。

第五節 「铸劍」に見られる「死」について

「铸劍」には復讐譚を題材とした歴史小説である。「铸劍」では父親の仇を討とうとする眉間尺とその復讐の幫助をする黒い男、復讐の仇である王のそれぞれの「死」が描かれている。王は封建社会の象徴的な人物なので魯迅の抹殺される対象となるのは理解できるが、眉間尺と黒い男はなぜ死ななければならなかったのか。それは眉間尺が革命へ優柔不断な性格を内在していること、そして、黒い男は復讐の同志である眉間尺を死へ追いやったことが魯迅に抹殺されなければならなかった要素であると考察する。

第三章 晩年に見られる「死」について

魯迅の晩年に近い作である『故事新編』の「采薇」に見られる「死」について考察する。「采薇」は『史記』の「伯夷列伝」を題材とした歴史小説である。題材になかった「悪ふざけ」の要素を追加し、魯迅が嫌悪する礼教社会の権化を「死」によって抹殺している。また「悪ふざけ」の要素が「死」をより暴力性の強いものとしていると考察する。

以上より、魯迅は、一貫して魯迅が嫌悪する負の要素を「死」によって抹殺していると考察する。

主任指導教員 鈴木敏雄
指導教員 鈴木敏雄